

おすすめ本

学校長 青木 睦人

「死ぬほど読書」 丹羽 宇一郎 幻冬舎新書

コロナウイルス感染症拡大防止のために、5月末までの臨時休業となってしまいました。さて、このような全世界的な学校が休業となる状況が17世紀にもありました。何が原因かは、生徒の皆さんで調べて下さいね。ニュートンも、当時在籍していたケンブリッジ大学も閉鎖されることになり、故郷へと戻り、自由に思考する時間を得ることができました。そして、この故郷での休暇中に、ニュートンは、現在では「微分積分学」と呼ばれる分野や、「光学」、そして「万有引力」の着想などに没頭しました。「ニュートンの三大業績」とされるものは、いずれも故郷の田舎に帰っていた18か月間の休暇中に成し遂げています。なので、この期間のことを後にニュートンは、「創造的休暇」と呼んだそうです。他にも多くの科学的な発見が、この期間に他の科学者によってもなされています。

今回皆さんに紹介する本は、筆者がある新聞に投書された「読書はしないといけないものなのか？」を見て驚き、書いたものです。皆さんの中にも、読書をしなくても必要なことはネットで調べればいいし、本なんて役に立たないから読む必要は無いと思っている人もいるかもしれません。でも、人がよりよく生きていくことを望むなら、「世の中には知らないことが無数にある」ことを自覚する必要があると筆者は言っています。そして自分の無知に気づくには、本がうってつけだといいます。筆者の豊富な読書量をもとに、本の選び方、読み方、活かし方、楽しみ方が書いてあります。

生徒の皆さんも、この休業期間中に、与えられた課題に取り組むことだけでなく、本を読むことや、今でしか体験できないことに取り組み、この時期を「創造的休暇」にして欲しいと思いこの本をおすすめします。